

ナイアガラタイムス

2020年12月20日 第4号

人 カ 夢



目次

◇THE～極み～	奥村ユズルさん	p2			
◇シ	ネ	マ	滝	4	p7
◇編	集	後	記	p8	

THE～極み～

今回の「THE～極み～」は、前号の「美味な話」の続きで静岡のお話です。

滝の30年来の友人である静岡自立生活センターの奥村ユズルさん。彼と前号の原稿の件で連絡を取り合っていたら「たまには顔見せて」と言われ、ならば取材させてもらえないかとお願ひしてみたら快く引き受けくれました

ひよんな事で40年前から障害者のボランティアを始め、現在でも福祉を仕事としている奥村ユズルさんは、画家でもあるのです。

滝：奥村さんは、大学で静岡に来たんですよ。

奥村ユズル：はい、そうです。岐阜県多治見市が故郷で、大学で静岡に来ました。

滝：それは何年前？

奥村ユズル：1980年の事です。

滝：そこで障害者と出会うことになるんですね。

奥村ユズル：そうですね。大学で（法学部）講義を受けているだけではなくて、なにか世の中の役に立ちたいと思って、ボランティア活動がしなくなって社会福祉協議会に相談したら、ひまわり寮という障害者が共同で生活しているところがあるから、と言われ、行ったのが始まりです。

滝：その時の障害者の印象は？

奥村ユズル：当時は、障害者を街の中で見かける事はほとんどなくて、たまにテレビで取り上げられる障害者像というのは、ドラマのように感動的なものばかりでした。初めて会うので少し緊張して行った事を覚えています。そこにいたのが、渡辺正直（まさなお）という、静岡自立生活センターの創設者であり、代表者だった人です。彼は、進行性筋ジストロフィーという重度の障害者で、その彼の泊まりの介助をボランティアでやる事になりました。

滝：その時に「これが面白い」と思った事は？

奥村ユズル：大学で机の前に座って、教科書で講義を受ける世界とは全く違って、様々な人が出入りしていて、いろんな人に出会って学ぶ、生の勉強。そちらの方に魅力を感じて、そのうち大学に行かなくなって、ひまわり寮や障害者団体に出入りする事の方が多くなったんです。

滝：奥村さんは、絵も描かれているんですよ。それは、いつ頃から？

奥村ユズル：父が趣味で日本画を描いていた影響で、小さい頃から落書きをするのは好きでした。特に美術大学に進んだ訳ではないんですけど、大学に入ってから暇な時間が出来たので、絵を描き始めたというのがきっかけです。誰かに習った事はなくて、ほとんど独学なんです。

旅が好きで、これまでに世界50カ国以上旅行しているんですが、旅で出会

った風景や、感じた事をなにか表現したいと思った時に、絵を描くという手段が一番いいのかなと思ったんです。

滝：今まで行った国の中で印象的な国は？

奥村ユズル：若い頃、インドへの3カ月の放浪旅。それが一番印象的でしたね。そのあと、日本に帰ってきてから赤痢にかかっている事が分かって、一カ月近く東京の病院に隔離されたという経験もあります。あとは30才の頃ボランティアとしてイギリスで知的障害を持つ人達と一緒に農作業を1年近くやった事はとても印象に残っています。

滝：大学を卒業してから、一度は福祉以外の仕事に就いたんですね。

奥村ユズル：そうですけど、また旅行がしたくなって、仕事を辞めて、そのあとはバイトをして、お金が貯まると、世界各地をブラブラという生活をしていたんですけど、そろそろ身を落ちつけないということで、今までボランティアとして関わっていたこの団体に正式に就職したのが30才過ぎでした。

滝：奥村さんが就職した頃と今では、福祉制度が大分変わってきましたよね。

奥村ユズル：そうですね。もちろん私が関わりだした40年ぐらい前は、障害者の介助はすべてボランティアしかなかったです。その後、障害者の人達が運動することによって、静岡市では、登録ヘルパー制度が始まり、それでようやく2003年に支援費制度というものが始まって全国どこにいてもヘルパーが使えるという仕組みになって大分変わりましたよね。

滝：時代の流れで良し悪しを感じるころは？

奥村ユズル：今は、障害者の人達が運動しなくてもヘルパーが使える時代になりました。ただ、今の時代があるのは、かつて昔、渡辺さん達が運動してきた時代があったからだという事を忘れないようにしなければいけませんし、福祉が整ってきたと言っても、まだまだ不十分な部分があるので、今の若い人達も現状に満足しないで頑張ってもらいたいと思います。

滝：渡辺さんは、静岡の市議になられたんですね。

奥村ユズル：福祉を変えていくには、政策を決定する場に障害者自身が入った方がより効果があるのではないかという事で、選挙運動をやり、静岡市初の車椅子議員ということで6年間勤めました。

滝：選挙運動での思い出は？

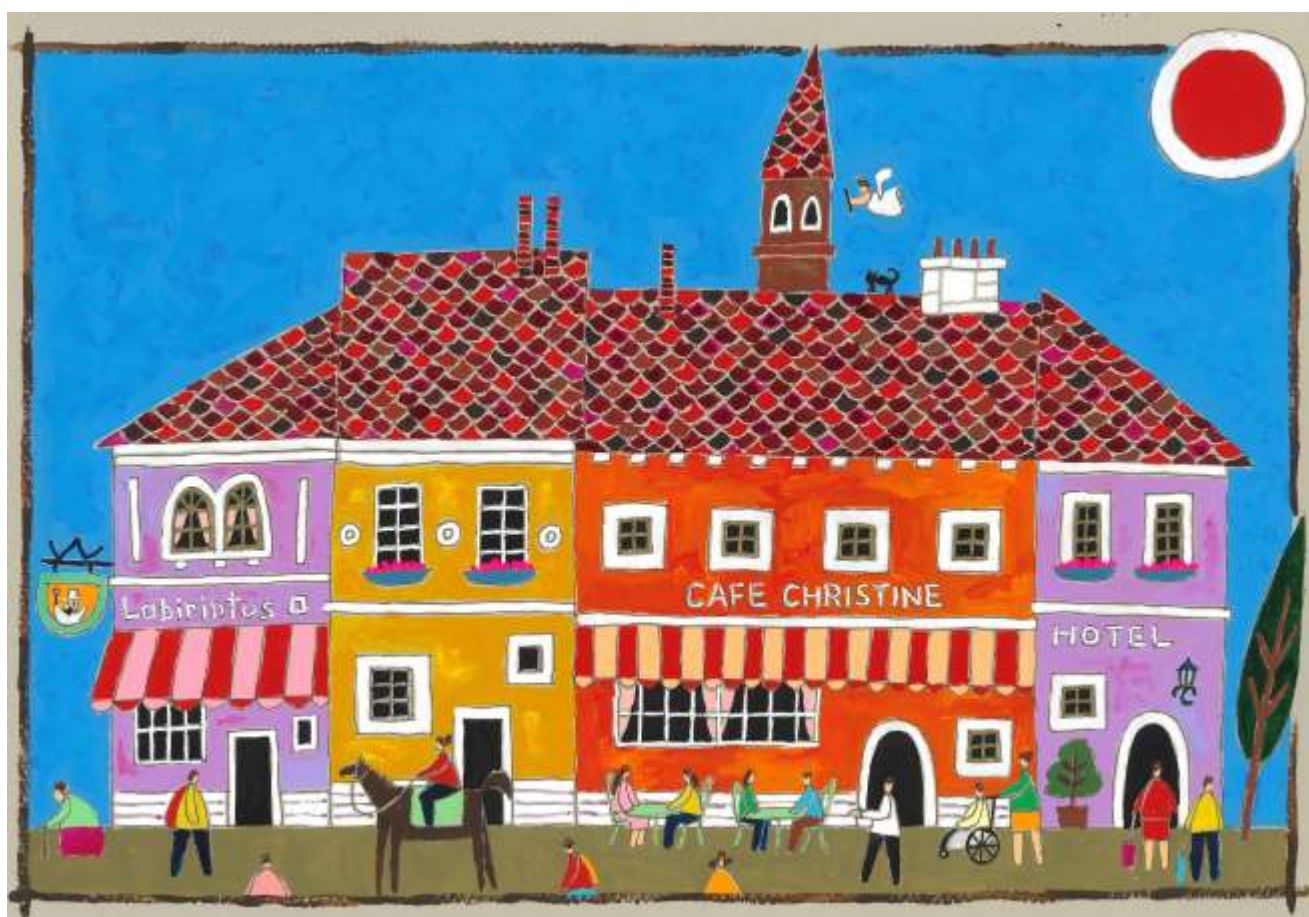
奥村ユズル：選挙運動でも車椅子の人が前に出た方がいいという事で、車椅子部隊でパレードをしたり、街頭演説で駆け付けたり、みんな一丸となって、力を合わせてやった事が、とてもいい思い出になっています。

滝：奥村さんは、絵を描く以外に趣味はありますか？

奥村ユズル：アウトドアが全般に好きで、登山とか、カヌーもしますし、キャンプも好きです。自分の車は軽のキャンピングカーなんです。屋根がポーンと持ち上がって、四人寝れるタイプで、車中泊をするのも好きです。

滝：どうやって仕事と画家を両立しているんですか？

奥村ユズル：絵を描くのは、もっぱら深夜なんです。私の生活パターンはとても変わっていて、仕事が終わって家に帰って、食事をして、8時半か9時頃に1回寝ちゃうんです。1回3時間ぐらい寝て、深夜12時から3時まで絵を描いて、また朝の6時まで寝るという感じで、睡眠時間が完全に前半と後半に分断されているという生活をかれこれ10年以上して、もうすっかり体も慣れて、そんな感じでなんとかふたつの仕事を両立しています。あと、昼間のストレスが絵を描く事によって解消されるような効果があるかなと思っています。それから昼間、職場で出会う障害を持つ人達、車椅子の人達やお年寄りを私が描く絵の中に入れて、誰もが住みやすいノーマライゼーションな社会を表現している事で仕事にも役に立っているのかなと思っています。



滝：奥村さんは、大学を卒業してから、自立生活センターに住んでいた事があるんですよね。

奥村ユズル：大学を本当だったら4年間で卒業する予定だったんですけど、あまりにも授業をサボり過ぎていて、障害者団体に入ったり、インドに放浪に行っちゃったりして卒業出来なかったんです。その時、アパートに住んでいたんですけど、もう親に迷惑かけられないとアパートを引き払って、住む所がなくなっちゃったんです。それで当時、渡辺が生活していた部屋のとなりが自立生活センターの事務所だったんで、そこに寝袋ひとつ持って、住みついちゃったんです。

滝：何故、そこまで、関わりたいと思ったのですか。

奥村ユズル：まあ、自立生活センターに関わっている人達が好きだったんでしょうね。

滝：渡辺さんの思い出は？

奥村ユズル：渡辺さんは自立生活センターのとなりに住んでいたんで、しょっちゅう出入りして、渡辺さんのボランティアが急にキャンセルになった時は、私が泊まりの介助に入ったりもしていた。その代わりに洗濯もやらせてもらって、お風呂も入らせてもらって、お互いにヘルプし合うような生活をしていました。

滝：渡辺さんって、どんな人でしたか？

奥村ユズル：いろんな人がボランティアにいて、中には、宗教をやっている人、政治的な活動をしている人、性格も様々な人達がいて、そういう色々な人に、どうしても介助してもらわないと生きていけない。なので、話題も豊富だったし、誰とでも付き合える心が広くて懐が深い人でした。

滝：最初の方に出てきた「ひまわり寮」って、どんなところですか？

奥村ユズル：私に関わった時は三人住んでいたのかな。毎晩、お酒飲んで議論したり、議論が熱をおびてくるととっくみ合いのケンカになったり、麻雀を朝までやったりとか、エネルギーの溢れた人ばかりで面白かったですね。それで夕食づくりのボランティアで、毎日いろんな女性が来る訳ですけど、そうすると、女性目当てに用もないのに男連中が集まってきて、男女の出会いの場にもなっていた。

結局、ルールがなんにもない、今で言うグループホームだと、きっとこんな事は出来ない。ですから、ルールは話し合って決める、健常者障害者の区別もない、障害者自身でルールを決めて、自分達で運営していく。お酒も自由、門限もない、男女交際も自由そういう自由さはありましたね。今の制度の中では、とても出来ないでしょうね。

滝：ヘルパー制度も整って、駅とかバスなどのバリアフリーも整って、これから僕達は、どこへ向かっていけばいいんだろうね。

奥村ユズル：難しいところですよ。制度はかなり整ったというところで。ただ、やはりまだ社会の中で障害者というと、「社会にとってお荷物だ」とか「生きてい

ない方がいいのではないか」という優性思想的な考え方が根強くて、それをどのように変えていくか。特に重度障害者は「生きている価値がないんじゃないか」と思う人がまだいる訳ですよ。「生きていても辛いだけで、逆に死なせてあげた方が本人のためじゃないか」こういう考え方が進んでしまうと、やまゆり園事件、京都のALSの囑託殺人事件になったりしてしまう。それに立ち向かっていくには、「障害者だって楽しい事はいっぱいあるんだよ」「障害者だって人生を楽しんでいるんだよ」という姿を見せていくしかないのかなと。

滝：さっき、ポスターを見たんですけど、12月に、個展を開かれるんですよね。

奥村ユズル：ああ、そうです。丁度、一カ月後の12月15日から約一週間、静岡県立美術館の県民ギャラリーで、個展をやります。今回は、私が働いているセンターの生活介護の「それいゆ」の人達の作品展を同じ会場でコラボしてやろうかなと思っています。彼らが作った染め物とか、アート作品を一緒に展示します。

滝：これから画家としての夢は？

奥村ユズル：今は昼間、障害者団体で働いているので、絵を描くのは夜中の3時間ぐらいなんですけど、ここを定年退職になって、画家一本になったら、私の車はキャンピングカーなので、車の中で、絵を描く事も、寝る事も出来るので、日本中を旅をして、絵を描いて、全国各地で展覧会を開くようなこともしてみたいですね。



シネマ滝 4

「最高の人生の見つけ方」(2019年10月公開)

主演は吉永小百合と天海祐希。我々の年代(50代の半ばぐらい)の女性には「小百合」という名前が多い。これは、きっと我々の親世代が彼女に憧れて自分の子供に名づけてしまったのではないだろうか。それほど女優、吉永小百合。それぐらい長いキャリアを持つ彼女がスカイダイビングまでしてしまう映画なのだ。

末期ガンになり入院している幸枝(吉永小百合)が、ある時、病院の売店で12才の少女が落としたおくり手帳を拾う。その中には「死ぬまでにやりたい事」と題したリストがあった。それを見た幸枝は「これを見ていると、夢がたくさん詰まっている。自分も死期が近いというのに何一つやりたい事なんて思い浮かばない。あの子の気持ちを見習いたい」と思い、それを同じ病室だった凄腕女社長まこ(天海祐希)に話す。すると、まこは「あんた普通じゃないね、その話乗った」と言い、そこから二人の旅が始まる。

そのリストとは、「スカイダイビングをする」「ももいろクローバーZのライブに行く」「日本一大きなパフェを食べる」「逆上がりができるようになる」「ウェディングドレスを着る」「宇宙旅行をする」これを二人でひとつずつ叶えていく。

まこは大手建設会社の女社長。お金はいくらでもある。豪快な実現力でこれをすべて叶えていく展開は見ていて気持ちがいい

12才の少女の夢を叶えていく中で、それまでバリバリの50代の社長、平凡な70代の主婦という別世界にいた二人の掛け合いも見どころのひとつ。映画の終盤に、ちょっとした事で芯が強い幸枝がまこに物を言う場面があるのだが、滝にはそのシーンが印象に残っている。

なにが起こってもおかしくない日々、自分の人生に責任を持ちながら納得がいく生き方をしていきたいと滝は思う。



編集後記

2020年。この響きを誰もが忘れる事はないだろう。オリンピックイヤーで浮かれ気分だったのに、年の始めに「中国でコロナというウイルスが流行しているらしい」と耳にして、そのあと、あっという間に日本中を駆け巡ってしまった。そして、新しい生活様式を取るようになった私達。マスコミには聞いた事もない単語がならび、毎日、夕方のニュースで発表される新規感染者の数を真剣に見てしまう。こんな日々はいつまで続くのだろう。来年の夏にはワクチンの接種が国内でも出来るようになるとは聞かすが、この状況が終わる日は本当に来るのだろうか。

さて、今号のナイアガラタイムスは、「THE～極み～」をメインにして作ってみました。滝の長年の友人である奥村ユズルさん。始めは、この40年の障害福祉の事について語ってもらおうと思ったら、「世界50カ国以上旅をしている」とか「毎日の睡眠時間を二回に分けている」とか知らない事ばかりで、滝自身も面白い取材でした。

自分になにが出来ようかと始めた「ナイアガラタイムス」。「THE～極み～」では4人の方にインタビューをし、話を聞き出していくというのは難しいことなんだという事を思い知った企画でした。けれど皆さん一生懸命に答えて頂き、いい記事を作る事が出来ました。そして、読者の皆様。多くの方々に暖かい言葉を頂き感謝しかありません。本当にありがとうございました。

来年は、本当に誰もが笑顔で暮らせる年になればいいですね。

よい年をお迎えください

それでは

発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

振込先

フク)アトリエ

ゆうちょ銀行 ○九八(098)店

普通 1208349

記号番号 10960-12083491